



Title	新古今歌人の十如是の和歌について：九条家の舎利講を舞台として
Author(s)	谷, 知子
Citation	語文. 1992, 59, p. 12-20
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68847
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

新古今歌人の十如是の和歌について

——九条家の舍利講を舞台として——

はじめに

九条兼実とその弟慈円は、舍利講を頻繁に催し、歌人たちに多くの結縁和歌を詠ませた。この実態と意義については、拙稿「九条家の舍利講と和歌」(『中世文学』三六号、平成四・六)において述べたことがある。和歌が本来的に持つと信じられてきた呪術的な力と、舍利に付与された靈力とが、社会変革を夢見て結び付いた、そこに九条家の舍利講と和歌の意味を見た。

本稿では、兼実が催した舍利講において詠まれた十如是の歌をまとめて読んでみたい。対象とする歌人は、慈円・藤原良経・藤原定家・藤原有家・二条院讃岐である。十如是は、安良岡康作氏が中世文学の特質とされる「道理」を表す。観念的でありながら、同時に現実を支配するこの十如是という「道理」を、新古今歌人がどのように三十一文字の世界の中で具体化させたかを、個々の歌を読むことよって探ってみよう。

歌の問題に入る前に、十如是とは何か、そして九条家の舍利講で詠まれたことの背景について、簡単に触れておく。

十如是は『正法華経』には見えず、鳩摩羅什訳『妙法蓮華経』にのみ見える。漢訳『法華経』に基づき、十如是を体系化したのが天台大師智顛であった。智顛は『摩訶止観』、『法華玄義』、『法華文句』の、いわゆる天台三大部の中で十如是を定義づけている。が、存在の真実の姿は具体的な規定を超えたところにあるという彼の実相観に基づき、定義はあくまで抽象的で、内容を規定的に示すことはしない。よって、古来十如是の一々の具体相は容易には知り難いとされ、種々の口伝が生み出されてきた。こうした口伝類や先学のご研究を踏まえ、十如是の一々についての私なりの理解をここに示しておきたい。

十如是とは、一切法(存在するもの全て)を十種に分類したものの、いわば範疇である。その一々、如是相・性・体・力・作・因・縁・果・報・本末究竟等が、相互に依存しあい、有機的に総合し

谷 知 子

たものが、一切法の真実の姿なのである。十如是を解釈する上で、三段階に分類する方法がしばしばとられる。第一段は相・性・体で、一切法の自同的本質を表し、第二段は力・作・因・縁・果・報で、一切法の縁成を表し、第三段は本末究竟等で、一切法の自同的本質と縁成を総合する。

第一段の相は外にあらわれる形相で、表面的、偶然的性質を持ち、無常なものである。性は外からは見えないが、万物の内面に共通する唯一絶対の性質をいう。体は相と性とを兼ね備えた、事物の本体・体質・主質である。三諦に比すれば、相は仮、性は空、体は中に相当する。

第二段は、時間概念を基軸にした因果の法則を明かす。因は直接的な原因、縁は間接的補助因、果は因と縁によってもたらされる結果、報は因果の報い、主に後世の報いをいう。さらに、力はこゝろの縁起を動かす潜在的力、作は如是力によつて為作されたもの、並びにその過程全体をいう。

第三段の本末究竟等は、本（相）から報（末）までの九如是の全てが、相互に関係しあい、貫き通していることを意味する。

以上が十如是の一々についての概観である。が、先述の如く、その具体相については明文化されていないので、叡山周辺に限らず、一般知識の間でも様々な口伝や問答が生み出されていたらしい。例えば、『表白集』を開けば、大江匡房・藤原敦光といった文人貴族が草した何種もの「十如是義表白」が見えるし、『本朝無題詩』山寺の部にも「十如是教問」僧識「七不堪心於」我深」（藤原道憲）、「二諦義開風巻」霧「十如理朗月離」雲」（藤原敦光）などの詩句が見え、彼らの十如是に対する関心の高さを窺わせる。

こうした十如是に対する関心の強さは、当時の天台実相論の流行の一環として理解することが妥当であろう。十如是の表白文を草した藤原敦光は、同時に「三觀義表白」「二諦義表白」「三身義表白」「三周義表白」などを著している。またこの敦光は兼実の父忠通の生涯の詩友であり、忠通文壇の指導者であった。忠通周辺に集う文人貴族たちの中で天台教学が盛んに論議されていたことは想像に難くないし、時には十如是の詩歌が詠まれることもあったかもしれない。兼実主催の舍利講における十如是の詩歌の中に、こうした忠通時代の文化、伝統を受け継ぐ部分が少なからずあるだろうと推測する。

二

では、場の問題を整理した上で、十如是の歌の読みに入りたいと思う。

兼実主催の舍利講で十如是の歌を詠み残した歌人は、兼実の弟慈円・兼実の子良経・兼実の娘任子に出仕した二条院讃岐・九条家の近臣藤原定家・藤原有家の五人が知られる。慈円の歌は家集『拾玉集』（四五―一五―四五―二四番）「夏日舍利講演次同詠十如法文倭歌」に十首、良経の歌は家集『秋篠月清集』（一五九―二一六〇）一番「舍利講の次に、十如是を」に十首、二条院讃岐の歌は『新古今集』（一九六五番）「入道前閑白家に、十如是歌よませ侍りけるに、如是報」、『新勅撰集』（六二〇番「如是性」）に二首、藤原定家の歌は家集『拾遺愚草』（二七三―二七四番）「後法性寺入道閑白殿舍利講に、詩歌結縁あるべし」として、十如是の心を」に十首、藤原有家の歌は『続古今集』（七六六番）「本末究竟等の

(こころを)に一首、それぞれ収められている。

いつ催されたかについては、

果如にはなにをかおもふきさらぎの二十日の夢をさまして
し哉
(拾玉集・四五二二)

が掛かりとなる。この「きさらぎの二十日の夢」とは、兼美の嫡男良通が文治四年(一一八八)二月二十日に急逝したことを指すのであろう。九条家の嫡男を失うという悪夢を早く醒ましてほしいと願う歌意からして、文治四年からそう隔たらない年に詠まれたか。また、参加歌人の中に二条院讚岐がいるが、彼女が九条家の催しに参加するとすれば、文治六年以降である可能性が高い。以上二点から、文治六年以降の夏、それも数年の間に催されたと推測しておく。

では、歌の読みに入る。既にある注釈として、畑中多忠著『類題法文和歌集注解』に簡単な抄注があり、藤原定家の歌については、古注の他に、久保田淳氏の訳注がある。また、以前に良経の十首については、本歌・参考歌を掲出したことがあり、原則として重複は避けるので参照されたい。

以下如は相の歌から掲出していくが、便宜上十如は歌の末尾の括弧内には歌人名と家集番号(ただし二条院讚岐と有家の場合は勅撰集名と番号)のみ記す。

如是相を見るぞかなしき拘戸那城双樹にわけし仏舍利かさは
(慈円・四五一一)

あさごとにかゞみのうへに見るかげのむなしかりけるよにや
どるかな
(良経・一五九二)

あともなくむなしき空にたなびけど雲のかたちはひとつなら

ぬを

(定家・二七三三)

慈円は相から報までの九如是关于三転読を試みている。如是相は三身中応身(釈迦)如来に比されるので、釈迦の身体、その遺骨を相と詠んだのである。

良経と定家は、『維摩経』方便品の無常十喩から素材を取ったかと思われる。良経は『維摩経』の「是身如影 従業縁 現」に拠るか。良経以前に藤原公任がこの「影」を「鏡のうちの影」(公任・二九五)と読み替えている。定家は「是身如浮雲 須臾変滅」に拠るか。ただし、『摩訶止観』(岩波文庫(上)五九頁)にも明鏡の像を三諦の仮に譬える箇所があるし、『往生要集』(思想大系「源信」四七頁)にも無常を空の雲に譬える箇所があるなど、『維摩経』だけを原拠として限定することは難しいかもしれない。が、『維摩経』十喩の一般への浸透度から考えて、二人が無常相を詠むにあたって十喩の中から素材を取ったという可能性は高いと思う。さらに、この素材を和歌的伝統の上から見ると、鏡像は白髪、嘆老の意と強く結び付いているし、空の雲は死者を荼毘に付した後の煙の行く末として詠まれることが多い。良経・定家は、『維摩経』十喩の素材に、歌語としての鏡像・雲が持つ死や無常のイメージを重ねて、如是相を表現しようとしたのではないか。

次に如是性の歌を掲げる。

性如是のくちぬめぐみぞたのもしき仏のたねはこの身なりけ
り
(慈円・四五一一)

さまぐくむまれきにけるよ、もみなをなじ月こそむねにす
みけれ
(良経・一五九三)

にこり江やを河の水にしずめどもまことはおなじ山のはの月

(定家・二七三〇四)

すむとても思ひもしらぬ身のうちにしたひてのこるありあけ
の月

(讃岐・新勅撰集・釈教・六二〇)

四人共に身の内にある仏性を詠む。良経・定家・讃岐は仏性を「月」と、慈円は「仏のたね」と表現した。また、この仏性を覆い隠す煩惱、汚れた現実を、慈円は「く(朽)ちぬ」で暗示し、他の三人は「さま／＼にむまれきにけるよ、」にこり江やを河の水にしずめども」「思ひもしらぬ身」と表現する。

次に如是体の歌を掲げる。

是体如は東大寺なる盧遮那仏げにあか金の大仏かな

(慈円・四五一七)

はるのよのけぶりにきえし月かげののこるすがたもよをてらしけり

(良経・一五九四)

かりそめに鶴の林の名をたてしけぶりののちのすがたをぞ見る

(定家・二七三三五)

体は三身中の法身(盧遮那)如来に相当する。慈円はこの盧遮那仏の化現としての東大寺大仏を詠んだ。良経・定家は、入滅後の釈迦が永遠の真理の象徴となったことを詠んだ。体は最も理解困難で、一切法の究極の姿とされているが、三人共に現代でいう真理の象徴をもって体とした。

次に第二段の力・作・因・縁・果・報、一切法の縁成を詠んだ歌に移る。まず如是力の歌から。

如是力に世ををこさばやをとにきく大諾健那又は民長

(慈円・四五一八)

ふりつもるゆきにたわまぬまつがえの心つよくもはるをまつ
かな

(良経・一五九五)

みなれぎをいはまになみはちがへどもたゆまずのぼる宇治の
川舟

(定家・二七三三〇)

慈円詠の「大諾健那」は金剛力士、「民長」は国王などの意である。共に仏法を護持する存在で、力の象徴でもある。この力をもって王法仏法相即の理想国家を復興したいという願望を詠んだものである。

良経・定家は、一時的な瞬発力ではなく、持続的な力を詠んだ。そして、この持続力を、良経は積雪の重みに耐えながら春を待つ松の木に譬え、定家は飛び交う波と闘いながら川を遡上していく舟に譬えた。これらの比喩は、和歌の世界においては、

柚山のこずゑにおもる雪をれにたえぬなげきの身をくぐくら
む

(新古今集・一五八二・藤原俊成)

河ぶねののほりわづらふ綱手なはくるしくてのみ世をわたる
かな

(新古今集・一七七五・藤原頼輔、右大臣家百首)

の如く、政治的不遇や官位昇進の苦難を訴える述懐歌においてしばしば用いられるものであった。良経の持続力は静的で、定家の動的であるのは、それぞれの立場を表しているが、共に降りかかる困難に耐えながら、家の繁栄とか官位昇進といった世俗的な善果を目指したものである。三人三様の力のイメージがよく出ていて興味深い。

次は、この如是力によってもたらされる如是作の歌を掲げる。

作如是にはつき身も猶ぞたのもしきみす事なきをなす事にして

(慈円・四五一九)

ひをへつ、すがくさ、かにひとすぢにいとなみくらすはてを
しらはや
(良経・一五九六)

春の田に心をつくる山賤も植うるさなへぞ色にいでける

(定家・二七七七)

慈円詠は、俗世においては否定されるべき「なす事なき」を、「無為」に転じて肯定したものである。良経・定家は、蜘蛛や山賤といった卑小なるものが、日々一心に巢や田を作る労働行為を描く。良経・定家は、如是力同様、如是作も俗世における営為を詠んでいるが、定家がその営為の実りを詠んでいるのに対して、良経は巢作りに埋没する蜘蛛の姿に自分自身の日常生活を重ね合わせ、その際限なき、空しさを詠んだ。

次は如是因。

是因如に¹⁾「¹⁾」字の字義を思ふ哉荻なきやどに秋のゆふ風

(慈円・四五二〇)

たねしあればほとけの身ともなりぬべしいはにもまつはおい
ける物を
(良経・一五九七)

たねまきし春をわすれぬつまなれや垣ほにしのおやまとなで
しこ
(定家・二七三八)

慈円詠の「¹⁾」は詞Haの種字で、因の意を表す。「思ふ」は観想するということ。下句は無音であること、「¹⁾」が五大の中の風、色でいえば白色に対応することと関わるか。

良経・定家は共に因を「たね」と表現している。良経は果の意を表す「実」を「身」に掛けて、一切衆生の成仏が可能であることを詠んだ。定家は、撫子の花と、その因となった種を詠んでいるが、種蒔きした撫子は、自分の娘の比喩として詠まれることが

多い。例えば、任子入内屏風和歌において定家は、

たねまきてちりだにすゑぬ床夏の花のさかりは君のみぞみむ

(拾遺愚草・一七九三)

と詠んでいるが、この「床夏(撫子)の花」を久保田淳氏は兼実の娘任子の比喩と解しておられる。定家の如是因の歌にもこのような寓意を認めるならば、「やまとなでしこ」は任子、「たねまきし春」は兼実をはじめとする九条家の繁栄を意味することになる。

次は因果の働きを補助する間接的原因である如是縁の歌に移る。

如是縁よあはれ仏種もなによりか起りそめけむけふの舍利

講
(慈円・四五二一)

きしにいたるかせのしるべをおもふかなくるしきうみにふな
よそひして
(良経・一五九八)

年をへて子日になる、ひめこ松ひくにぞちよのかげも見えけ
る
(定家・二七三九)

如是縁を、慈円は今日の舍利講、良経は業風、定家は小松の根びきで表している。慈円・良経は共に悟りという善果に到達するための手助けとして詠んでいるが、定家の歌は前の如是因歌同様、任子入内の寓意の有無が問題となる。定家詠は

ねのびしてしめつる野べのひめこ松ひかてやちよのかげを待
たまし

(新古今集・雑・七〇九・藤原清正、和漢朗詠集・二三三)
を本歌とし、否定を肯定に転じたものであるが、子日の松をひくという行為は、時に次のような詠まれ方をするところがある。

子日の松を身にたとへ侍りて

ひく人もなくておいぬるまつはた、ねのひをよそにき、やす

ぐさむ

(能宣 I・四一四)

俊頼(俊頼 I・二二)や俊成(俊成 I・一〇三)の述懐歌にも見られる用法である。この場合の「ひく」には引き立てる、即ち官位昇進や出世の手助けをするという意が込められている。定家の歌の場合、姫小松であり、ひくことによって、「ちよのかげ」が見えるのだから、定家自身の寓意とするのは無理だろう。この場合は、前歌同様任子入内を意味していると考えるべきではないか。とすると、土の中から根びきされる松小松は入内する任子、そして根びきする人は「ちとせまでかぎれる松もけふよりは君にひかれて万代やへむ」(拾遺集・春・二四・能宣)と同じく主君で、この場合は後鳥羽天皇を指しているということになる。つまり、後鳥羽天皇のもとに入内することによって、九条家にますますの繁栄をもたらすであろうことを言祝いでいるかと思われる。

次は如是果の歌について。

果如是にはなにをかおもふきさらぎの二十日の夢をさまして

し哉 (慈円・四五二)

秋ふかくなりはてにけるみやまかなはな見えだにこのみいろづく (良経・一五九九)

袖の香をよそへてうゑしたち花もあさおくしもに身をむすぶまで (定家・二七四〇)

三人共に善果を詠む。慈円詠は先述した如く文治四年二月二十日の良通の死という悪夢から醒めることを願ったものである。良経・定家は、季節の推移によって得られる実を詠んだ。時がたてば花は散り、人は去る。これが無常の世のならいであるが、一見無常に見える世も、花が散った後には木の実が色づくし、別

れた人の袖の香になぞらえて植えた橘は、霜枯れすることなく、黄金色の実をつけるのである。時は過ぎ、事物はめまぐるしく変化するが、現象の奥には永遠不変の真理がひそんでおり、どんなものでも善果に到達することは可能なのである。

次は、第二段の最後如是報について。

是報如の如々のことはり十にしてむなしき空に秋のよの月

(慈円・四五三)

すぎ、けるよ、にやつみをかさねけむむくひかなしききのふ

けふかな (良経・一六〇〇)

しらぬ世を思ふもつらき目のまへに又なげきつむのちのけぶ

りよ (定家・二七四一)

うきも猶むかしのゆゑとおもはずはいかにこの世を恨みはて

まし (讚岐・新古今集・釈教・一九六五)

慈円は、一切法の真実の姿は十(十如是)あるが、本来は秋の

月のように清浄で不変のもの唯一であることを詠んだ。良経・讚

岐は前世の報として味わう現世の苦しみを、定家は現世の報として

受ける地獄の責め苦を詠んだ。三人共に悪報である。

以上が第二段の歌である。良経・定家の歌には時間の経過が

なり意識的に詠み込まれている。特に定家は、早苗の成長や、「春

をわすれぬつま」としての撫子、「ちよのかげ」を暗示する松、

懐旧の意と強く結び付いた橘などを素材として選び、過去・現在・

未来をつなぐ時間軸を強調しているように思われる。そして、九

条家の繁栄を詠み込むなど、現実を肯定しようとする姿勢が窺わ

れる。

では、最後に第三段、本末究竟等の歌について述べる。この第

三段は、十如是中最も重要な箇所である。

是本末究竟等にも春くれて木ずゑの花のねにかへりぬる

(慈円・四五二四)

すゑのつゆもとのしづくをひとつぞとおもひはて、もそではぬれけり

(良経・一六〇一)

あさちふやまじる蓬のすゑ葉までもとの心のかはりやはする

(定家・二七四二)

あさちはらかぜをまつまのすゑの露つひにはそれもものしづくを

(有家・続古今集・釈教・七六六)

慈円は「本末」を「木ずゑの花」「ね(根)」と、「等」を「花悔_レ帰_レ根無_レ益_レ悔」(和漢朗詠集・閏三月・六一・滋藤)を踏まえ、桜の花が散つて木の根に戻っていく景で表現した。つまり慈円は、事物の変化とは循環にすぎず、花が木の根に戻っていくように、結局全ては元に戻っていくと結論づけたのである。こうした慈円の世界観は「愚管抄」の中でもはつきりと語られている。

物ノ道理、吾国ノナリユクヤウハ、カクテコソヒシトハ落居

センズルコトニテ侍レ。法門ノ十如是ノ中ニモ、如是本末究竟等ト申コト也。カナラズ昔今ハカヘリアヒテ、ヤウハ昔今ナレバカハルヤウナレドモ、同スチニカヘリテモタフル事ニテ侍ナリ。(巻七)

また慈円は春日百首の十如是歌中の「本末究竟等」においても「九にひらきし門も立ち返りみなひとつにぞめぐりいりぬる」と循環する世界観を詠んでいる。

良経・有家は「本末」を、「すゑのつゆもとのしづくや世中のおくれさきだつためしなるらん」(新古今集・哀傷・七五七・遍

昭、和漢朗詠集・無常・七九八)に拠り、「すゑの露」「もとのしづく」と表現する。そして、時間差による表面的な異相を否定し、万物の行き着く所は同じとする。この点においては、慈円と同様であるが、本歌の性質上無常感は否めないし、良経歌の末句は涙を意味するもので、現実に対する懐疑的な姿勢が窺われる。

定家の設定した時間は長い。長い年月を経て、一見荒唐し変わり果ててしまったかに見える浅茅生や蓬も、その末葉に至るまで「もとの心」は全く変わっていないと詠んだ。時間の経過がもたらす事物の表面的な変化を否定した点では他の歌人と同様であるが、定家は不変の「もとの心」の存在を打ち出した。

本末究竟等は十如是の結論部分である。四人共に古歌を用いて時間の経過を詠み込む。そしてその上で、それぞれの方法で時間という概念を否定している。で、否定された時間概念のかわりにそれぞれが示した真実の真相とは何であったか。大雑把な言い方をすれば、慈円は世界を循環するものと捉え、定家は現象の奥にある不変なるものの存在を見、良経は不変と共に無常を示したといえよう。

以上、十如是の歌の読解を試みた。最後に各歌人の十如是の歌の特徴を簡単にまとめておきたい。

慈円は十如是の一々を歌頭に詠みいれ、九如是の三転読を試みた。全体的に「かなしき」「めぐみぞ」たのもしき、「世をおこさばや」「うき身も猶ぞ」たのもしき、「夢をさましてし哉」などと、自分の感情や願望を詠み込む傾向がある。また、密教的色彩が濃く、舎利講や十如是に霊力や効験を求める姿勢も見られる。そして、「愚管抄」に見られる反復史観・循環史観¹⁵がここでも唱

えられ、慈円の歴史観を信仰面から支えたと推測される。現在の世がどんなに絶望的であつても、花が根に帰っていくように、必ずまたよい時代がめぐってくるという希望を慈円に抱かせる思想の根拠となつたのである。

良経と定家の十如是歌は、発想・表現共に似通う点が多いが、良経は、現実世界やそこに生きる自分を無常で卑小なるものと捉える自らの思いをしばしば差し挟む傾向がある。定家は三人の中で最も現実社会に即した解釈をしている。そして、過去・現在・未来をつなぐ時間の流れが強調され、その上で最後にそうした時間の流れによる変化を否定し、永遠不変なるものの存在が示されている。

おわりに

九条家の舍利講は、舍利に付与された靈力をたのんで現実的な力を得るために催された。そこに同じく呪術的な力があると信じられていた和歌が結び付いた。この十如是の歌も、その中身は教理を詠むというよりも、現実社会に対する強い願望を舍利の力に託して詠むという傾向が強い。目の前にある現実はどうなかに絶望的であつても、その現象の奥にある真実とは希望の持てるものであつてほしい。いや、そうであるに違いない。そうした現実肯定主義が窺える。このような現実認識のあり方は、新古今歌風の特徴と無関係ではないと思われる。新古今歌人の四季の歌、特に冬の歌の中には、本歌の世界の消失、花や紅葉が散り、人も去つた後の風景を詠んだものが多い。時間の流れを強調した上であえて非在を詠む、こうした手法にこの十如是の歌と同様、現象の奥の

無常の彼方にある永遠不変なるものの存在を見出そうとする、彼らの遠い眼差しを看取することはその外れではないと思う。激動の時代に生まれた彼らを支えた根本的な世界観として注目しておきたいと思う。

本稿において用いた本文、歌番号は以下のとおりである。「拾玉集」(昭和四六・三・吉川弘文館)、「秋篠月清集」は片山享著「校本秋篠月清集とその研究」(昭和五一・六・笠間書院)所収の天理図書館蔵定家等自筆本、「拾遺愚草」は久保田淳著「詠注藤原定家全歌集」上下(昭和六〇・三・昭和六一・六・河出書房新社)に概ね拠るが、必要な箇所は他本を以て校合した。その他の私家集は「私家集大成」、勅撰集・私撰集は「新編国歌大観」に拠る。

注

(1) 『中世文学の探求』(昭和四五・有精堂)、『中世文学の理念』(昭和五六・笠間書院)など。

(2) 十如是については、「法華玄義」巻二上(大正新修大藏經三三三・六九二頁以下)、「法華文句」卷三上(大藏經三四・三七頁以下)、「摩訶止観」卷五上(岩波文庫二二二頁以下)の他、源信撰といわれる「十如是義私記」(「法華文句」に基づき、問答形式で記した)もの、「大日本仏教全書」三九・一二四頁以下)などの解説、また新田雅章著「天台実相論の研究」(昭和五六・平楽寺書店)等における概論、奥田慈応「十如是私釈」(「歌山学報」昭和八・一一)、松野顕佑「相性体の三如是に就いて」(「大崎学報」昭和二五・六)、村田常夫「天台の十如と華嚴の六相」(「天台学報」昭和三四・六)、宇治行忠「梵文方便品十如に関する異相とその若干の考察」(「樓神」昭和四三・一一)等の研究により理解した。

(3) 国史大系「本朝文集」所収。

(4) 大曾根章介「院政期の一鴻儒―藤原敦光の生涯―」(「国語と国文学」昭和五二・八)、佐藤道生「法性寺殿御集」考(「和漢比較文学叢書四」中古文学と漢文学II)「昭和六二・二・汲古書院」参照。

(5) 「拾玉集」四五・四五六番に「又」として、如是相・作如是の歌が見える。四五・二七・四五三〇番には如是相・性・体・力の四如是を、春夏秋冬の四季に寄せて詠んだ歌が見える。

- (6) 森本元子著『二条院讃岐とその周辺』(昭和五九・笠間書院) 一一二頁。
- (7) 『常緑口伝和歌』(石川常彦校注『拾遺愚草古注上』(昭和五八・三弥井書店)。本文として用いた久保田淳前掲書。
- (8) 『藤原良経の十如是の歌について』(『解釈』平成二・一〇)。
- (9) 畑中多忠『類題法文和歌集注解』。
- (10) 四五二六番歌は「作如是こそみぎり久しき御法なれときはかきはにとのづくりし
て。」
- (11) 「表」を見せ消らして「表」に改めている。「表」は詔字。多数の功德がこれより
生ずるといふ。
- (12) 本文として用いた久保田淳前掲書。
- (13) 『常緑口伝和歌』は、橘諸兄(たちばな)の家の繁栄が永久に続くことを橘に寄せて詠まれた
歌「橘者 実左倍花左倍 其葉左倍 枝尔霜露降 益常葉之樹」(万葉集・卷六・
雜・一〇一四・元明天皇)をふまえるかとする。
- (14) 久保田淳氏は「たづねてもわれこそはめ道もなく深きよもぎのものこのころを」
(源氏物語・蓬生・光源氏)を参考歌として引かれる。
- (15) 山本一「文武兼行の撰録臣―『愚管抄』における歴史と希望―」(『国語と国文学』
平成二・一一)。

— 放送大学非常勤講師 —